
夢屋

さーふぁー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢屋

【Nコード】

N3421C

【作者名】

さーふぁー

【あらすじ】

人は誰しも夢を持っている。だけど、その夢に気付いてない人もまた多い。本当の夢とは何か。この作品を通して考えてみたいと思います。

1. へんぴな広告

季節が初夏を間近に控えたある日、私は会社をクビになってしまった。

理由は、いわゆる経費削減のためのリストラで、私もその枠の中にしっかり入っていただけの話だ。

別れは、実にあっさりとしていた。

私が勤めていたのはパンフレットとか政府刊行物とかを作る小さな出版会社で、その日もパソコンに向かって作業をしていると部長がやってきて、「田島くん、ちょっと」とだけ言って、会議室に連れて行かれた。

中に入るなり、部長はおそらく最大限の注意をはらって、私にリストラの旨を説明した。できるだけ私を傷つけない、としているのが声や態度から伝わってきて、それが私には逆に心苦しかった。

部長が全ての話を伝え終わると、私は「今までありがとうございました」の一言を言い、会社を出た。部長の気遣いを無駄にしないようにこらえていた涙が、駅に向かう途中でとめどなく溢れてきた。特別、愛着のある会社というわけではなかったけれど、やっぱりショックだった。

私は泣きながら電車に乗り、泣きながら家に入って、自分の部屋のドアを閉めた。そのままベッドに突っ伏して、気がつくまで寝ていた。涙の筋が、頬に残ったままだった。

そんな訳で、私はいとも簡単に会社員からプータローの身に転げ落ちてしまったのだ。

泣いてばかりもいられなかった。第一、泣いたって仕事が無い込んでくるわけじゃないし、現実的に考えて、問題は山積みだった。

まず困ったのがアパートの家賃。仕事がある時は、まあギリギリだけど収入もあったし、一応の生活はできていたからよかったんだけど

ど、それが完全になくなってしまった今、私の後ろ盾は親の仕送りのみ。それだって、決して多い金額ではない。まさに死活問題だ。その仕送りをしてくれてる実家の両親にどうやって伝えるかも、悩みの種の一つだった。両親は、どちらかというと過保護だ。と思う。私は一人っ子ということもあって、小さい頃から両親の愛を一身に受けて育った。まあ、親なら誰だって子供に愛情を注ぐのは当然なんだけど、なんせ私の場合は、高校生になるまで親と一緒に寝ていたほどで、かなり度が過ぎていたと言える。

そんな環境のせいかは分からないけど、私はいいい意味でも悪い意味でも優しい性格の大人になった。

私が出版社に就職が決まって、上京し、一人暮らしを始めてからも、両親は2日に1度は電話をかけてきた。昨日も電話があった。リストラが決まったのは今日だから、そう遅くないうち、おそらく明日にはまた電話がかかってくるだろう。

その時に全て話すのが一番いいかとも思ったけど、やはりそんな両親に今日の件を告げることができるよう、私は強くなかった。

いろいろ考えた結果、両親に話すのは少し先送りする事にした。心配をかけたくないのが一番だったし、でももしかしたらこの選択は臆病な自分に言い訳しているだけかもしれないけど。

当面、大きな問題はそんなところだった。それらは私の心の中で重い鉛になって、その日、いつまでも私を苦しめ続けた。

次の日から、私は新しい仕事を探し始めた。

両親についた嘘のためにも、生活のためにも、そして何より自分のためにも何とかして仕事を見つけないければならない。

この不景気の世の中、正社員になるのは難しい。とりあえずアルバイトやパートでもいいから、という気持ちだった。

一日中歩き回って、求人雑誌を集めた。街中に貼ってある求人募集の貼り紙で、少しでも自分にできそうなものは、番号や必要事項、すぐにメモ帳にメモした。

そんなこんなで家に帰り着いたのは、夜の20時。両手は、かき集めてきた資料で、いっぱいになっていた。

さすがに疲れたけど、これだけあれば大丈夫だろうという変な安心感があったし、帰ってきて疲れを感じる間もなく目に入った留守電のランプ。やはり両親からだった。

再生してみると、内容はおおかたいつもと同じーつまり食事はちゃんととっているかとか、休みには帰ってきなさいとかそんなことが吹き込まれていた。

両親の声が、なにかもがいつも通りだったので、私はなんとなく安心した。ー大丈夫、いつも通り。

両親に「特別変わりないよ」という電話をし、お風呂に入り、ココアを入れ、リビングのテーブルの前に腰掛けた。

私は不安なことや嫌なことがあると、こうしてココアを飲むことにしている。今は違うけど、冬は体を温めてもくれるし、コーヒーでもミルクでもない、あの独特な味が私は好きだ。

テーブルにマグカップを置く。そこからほんのり立つ湯気をしばらく見つめてから、集めてきた資料を広げた。この中に、私の将来ーとまではいかなくとも、できる仕事はあるだろうか。

広げた資料は、テーブルの表面が見えなくなるくらいのものすごい量だった。できる仕事ー・きつとあるはずだ。

私はココアを一口飲むと、意を決して丹念に資料をチェックし始めた。部屋の時計はそろそろ21時30分をさそうとしていた。

ーーーー甘かった。いや、甘いのはココアの味じゃなくて、どうにかなるだろう、と考えていた自分だ。

求人雑誌はほぼ全滅だった。仕事自体は簡単なものが多かったけど、勤務時間、資格、場所、その他もろもろで、大半の広告が意味のないただの文字列となった。

せっかく書いてきたメモも同様だった。全く見る目がなかったとしか言いようがない。むしろくしゃしてきて、私はメモ帳ごとゴミ箱に投げ捨てた。本当に甘かった。

昨日あれだけ泣いたのに、悔しさと情けなさでまた涙が出そうになった。一体、私は何をしているんだろう。

しばらくぼーっとしてしまった。もしかしたら・・会社をクビになったのも、仕事が見つからないのも、私なんて誰からも必要とされてないからなんじゃないのか。私って、そんなにダメな人間なんだろうか。

気がつくくと、そんな事を考えていた。こんなんじゃ上手くいくものも、上手くいくはずがない。

少し、休もう。私は空になったマグカップにココアのおかわりを入れるため、よろよろと立ち上がった。はずみで、求人雑誌が一冊、床の上に広げ落ちた。今の私には、それさえも勘にさわった。

（「ーもう、なんなんだよ！」私は求人雑誌を乱暴に拾いあげると、メモ帳と同じようにゴミ箱行きにしてやろうとそれをぐしゃぐしゃに丸めようとした。

ちょうどその時だった。その一風変わった求人広告を、ページの隅に見つけたのは。

【こちらは夢屋です

年齢制限なし 特別な資格も必要ありません

この広告をご覧の方は、どなたでも採用いたします

ご希望の方は下記まで

03-52XX-47XX

】

・・・私、やっぱり疲れてるんだろうか。思わず一度目をこすった。だけど、その文面は何一つとして変わらなかった。

新種の詐欺かとも思ったけど、一応こうして雑誌に載ってるわけだし、どうやらそういうのとも違うらしい。

私は座りなおすと、本格的に広告を読み始めた。

夢屋は、「ゆめや」と読むのだろうか。ゆめや・・・どういうことをする会社なんだろう。でも、ここには書いてない。ちよっとそれが気になった。だけど、それよりもこの広告で一番気になるのが。「この広告をご覧の方は、どなたでも採用いたします」この部分。これは一体どういう意味なんだろうか。そりゃ、採用してくれるに越したことはないけど。でも・・・そう。話が美味しすぎる。美味しすぎるのだ。

とりあえず明らかなのは、さっきまで見てきた膨大な数の広告と、この「夢屋」は何もかも、根本的なところから違うということだ。だけど、私は不思議なくらい、このへんぴな広告に魅力を感じた。惹かれていた。そしていつしか、私には夢屋しかないとまで思い始めていた。

部屋の時計はそろそろ23時をさそうとしていた。

電話、どうしようかなあって思った。もう夜も更けていたし、一日遅れて、明日になってからでもいいし。

それでもウズウズしてしまう。この手が、体が、一分一秒でも早く夢屋と繋がりたいと欲している。

言い訳だ、きっと。明日なんて待ってられない。分かってるんだ、きっと。私は今電話する。

その言葉が頭の中で形になってからはあっという間だった。雑誌をしっかり握り締めると、夢屋の広告のところに、赤のサインペンで大きく丸をつけた。これで、よし。

電話機の前に立つ。数時間前は両親に電話するために使ったのが、次は夢屋なんてお天道様もご存知ない。(今は夜だから関係ないか)一つ深呼吸をして、広告に書いてあるナンバーをゆっくり正確にプッシュする。こんな数字の列を押すだけで、いろんな人と繋がることができるなんて、ホント電話機を考えた人はすごいなあ、なんて思っているうちにベルが鳴り始めた。

トウルル・・・

背中に緊張が走る。そう、私って緊張するとまず背中がキン、とするんだ。その次は・・・やっぱり。お腹がキリキリ痛くなってきた。しっかりしろ、私。ただの電話じゃないか。そう自分に言い聞かせることで、私は何とか心の平静を取り戻した。

3回目のコールで相手が出た。短すぎも長すぎもしない適切な長さで、私は少し感心した。

『はい、こちらは夢屋です。』

男の老人の声だった。声を聞いた瞬間、なんとなくアトムに出てくるお茶の水博士の顔が思い浮かんだ。優しい、父親のような、声。だったら、アトムは私だな。

『もしもし?』

受話器の向こうから声が聞こえて、ハッとした。いかん、完全にトリップしてしまっていた。

私は唾を飲み込むと、失礼のないようにゆっくり一言ずつ喋った。

「すみません!・・・あの、求人雑誌の広告を見てお電話させていだいたんですけど・・・」

急に喋ったせいで、小さい、かすれた声になってしまった。それでも、すぐに返答があった。

『ほう、それはそれは・・・ありがとうございます。歓迎いたしますよ。ようこそ、夢屋へ。』

優しい声だった。なにより、歓迎するなんて言われるとは思っていなかったの、なんだかくすぐったい嬉しさに体が包まれた。私もお札を言わなきゃと思ったら、先に老人が喋った。

『それでは、明日うちの方まで来てもらえますか?あなたの家からはそう遠くないはずですよ。』

はい、と言おうとしていくつか疑問が浮かんだ。さっき広告を見た時に感じた疑問。私は急いでそれらを頭の中で整理すると、一つずつ老人に尋ね始めた。

「あの、その前にいくつか聞きたいことがあるんですけど・・・」
『はい、何でしょう?』

「・・あの、広告に書いてある、どなたでも採用するっていうのはどういう意味なんでしょうか？」

一番最初に一番素直に感じた疑問。私はそれから聞いてみた。

『そのままの、意味ですよ。』

「そのまま？」

『難しいことは何もありません。あなたはうちの広告を見つけるべき人間だった。それだけのことです。』

(・・・?)

なんて答えたらいいか分からなかった。分からなくて黙っていたら、私が理解したと老人は思ったらしくて、こう続けた。

『まあ、とりあえず明日うちに来てください。その時の面談で詳しい事はお話します。面談というよりは顔合わせになります。』

「あの・・もう一つだけ聞いていいですか？夢屋・夢屋さんはどういうことをする会社なんでしょうか？」

『それも、明日お話しますよ。そう焦らないでください。』

「・・はい。」

私はそれから、夢屋のある場所と顔合わせの時間なんかを老人から教えてもらった。老人の言ったとおり、夢屋は駅から歩いて5分のところで、私にとって通勤には最適な距離だった。

なんとなく老人のペースで会話は進んだ。全てが分かったような気もするし、分からないような気もする。変な気分だった。

『では、明日。お待ちしていますよ。おやすみなさい。』

最後に老人はこう締めくくった。最後までお茶の水博士の声で、最後まで丁寧だ。

「あ、はい。おやすみなさい・・」

こうして電話は切れた。そういえば、名前、聞かれなかったなあと5分くらい経ってからふと思った。

2. 初出勤

次の日の朝は早起きをした。

4時間位しか、たぶん寝てないはずなんだけど、まるで小学校の遠足の日よろしく目がさえて朝の6時には起きてしまった。だから、早起きをしたというよりはしてしまったという方が正しいかもしれないけど。

起きたら、体中汗をかいていて気持ち悪かったので、軽くシャワーを浴びた。バスルームから出ると、だいぶ前に買ったきりで、一度も着ていなかった黒のスーツに着替えた。何か大事な用事ができた日に着よう、と思って買ったのはどうかは忘れたけど、今日ぐらいこのスーツが似合う日もないだろう。

全身を鏡に映す。ファッション誌のモデルさんには遠く及ばないけど、我ながら結構いけてると思った。くるっと回ってみたり、いろんなポーズをとったり、ふんふん鼻歌を歌ったりしていたら、時間に間に合わなくなりそうになったので、慌ててやめた。

朝食はいつもと変わらなかった。カリッと焼いたトーストに、ゆで卵つきのサラダ。すごくシンプルだけど、すごく落ち着くんだ。ああ、それから。

キッチンに入って、ココアを入れる。いつもはコーヒーを飲むけど、今日はとても大事な日だから。これだけがいつもと違う、私の朝食。トーストをかじりながら、サラダをときおり口に運びながら、ココアを飲んだ。そんな朝食は5分ほどで終わってしまった。

夢屋には、9時に行くことになっていた。前の仕事（出版社）の通勤時間と同じ。だから、目的地の場所は多少違えど、私が自分の時間配分のリズムを崩すことはなかった。それでも初日だし、遅刻するわけにはいけないので、少し早めに家を出た。

電車の中では、ずっと緊張していた。不思議なことに、乗る寸前ま

ではなんともなかったのに、シートの椅子に腰掛けたとたん、急に緊張が襲ってきたのだ。

リラックスしようと思って、吊革の広告や、向かいの窓の景色を眺めたりしてみたけど、あまり効果はなかった。背中がキンとなって、お腹が痛い。しまいには、電車のゴトン、ゴトンという音が、自分の心臓の音とダブって、気が遠くなりそうになった。

窓を開けて叫びたい気分だったけど、そんなことできるわけないし、お医者さんもここにはいないし、どーしよーどーしよーって思ってたなら、ようやく目的の駅に着いた。助かった。

通勤ラッシュの人ごみが、電車の中から溢れ出る。その流れに乗って、私も歩いた。

駅の外に出ると、日差しが眩しく照りつけてきて、思わず目を細めた。すごくいい天気だ。ひとつ深呼吸をして、空を見上げる。電車であれだけ緊張していたのが嘘のように気が楽になった。

左手にはめた腕時計で時間を見ると、まだ8時30分で結構余裕がある。少しお茶でもしていくか、とも思ったけど、気持ちの方は時間と違って余裕がなかった。なによりそれでは、家を早々に出た意味がない。

カバンから、昨日の夜即席で書いたメモを取り出す。メモというよりは、夢屋がある場所の地図が書いてある紙だ。

駅のホームを出たら、南へまっすぐ5分。単純に言うと、そこに夢屋はある。夢屋の老人は、どちらかという方向音痴な私でもスムーズに地図が書けるくらい説明が上手かった。

信号機に、銀行に、パン屋さん。いくつかの目印をたどって……私は夢屋にたどり着いた。

「……ここで……合ってるよね？」

思わず、そんな独り言を呟いてしまうくらい、その建物の外観は意外だった。

しっかりとした白いコンクリート。外から見たところ高さは15階はゆうにある。大きな入り口ゲートの上には、なるほど確かに金色

のプレートで「夢屋」と書いてあり、私の独り言が無駄ではないことを証明していた。

両脇に建っている、どこかの会社のビルにも全然ひけをとらず、夢屋はむしろ目立っている。

こういう表現も変だけど、てっきり老舗の骨董品屋のようなを想像していたので、ここが夢屋だと認識できた瞬間、少し足がすくんでしまった。

改めて謎だ。こんな立派な会社なのに、あの広告にはほとんど詳しいことは書いていなかった。分かっているのは、とりあえず私はここで働くんだということ……大丈夫だろうか？

でも、とりあえず働くんだから、とりあえず中に入ってみるしかない。

私はカバンを軽く肩にかけ直すと、真っ直ぐ前を見て夢屋への一歩を踏み出した。

自動ドアが左右に開く。外から見ただけじゃ当然、中はどんなか分からなかったけど、中もすごかった。

とにかく広い。広い広い。ちょっとした学校の運動場ぐらいはあるんじゃないだろうか？

広がっているフロアーの床は、毎日丁寧に掃除されているらしく、ピカピカに輝いている。

天井につけられたシャンデリアはじめ、並べられている数々の調度品も程よくバランスがとれている。何より、センスがいい。

ひととおり観察が終わったところで、何か違和感を感じた。……静かすぎる。視覚じゃなく、聴覚を通じて違和感の理由に気付いた。

誰も人がいない。入り口に入って、右斜め前に受付のカウンターがあるものの、そこにも人の気配は感じられなかった。

（どうなってんだろ。）

カバンを片手でブラブラさせながら、カウンターと入り口の間を行

ったり来たりしてみたけど、当たり前のように人は来なかった。次第にそんな意味のない行動をするのもばからしくなってきた。フロアーの真ん中にでんと置いてある大きなソファアに腰掛けた。

（退屈だなあ・・）大きなソファは、自分を優しく包んでくれるシルクのベールのようで、自然と深ぶかとした座り方になってしまふ。静かすぎて、しばらくそうしているうちに私はうとうととしてきた。今頃になって、昨日の4時間睡眠が崇ってしまった。

（ダメだ、起きなきゃ・・）うとうと・・（起きなきゃ・・）うと
うと・・（起き・・）oooooooooo

両手で細かくちぎったパンを放り投げると、面白いようにたくさん
のハトが集まってきた。自分の実力じゃなくてパン目当てで来たこ
とは分かっているのに、ちよつとした手品師になったようで気分が
良くなった。

デーデーポポー、デーデーポポー
必死でエサをついばむ彼らは、それでも鳴くことを忘れていない。

デーデーポポー、デーデーポポー

彼らに投げる分のパンもなくなって、私はかんだ姿勢になりながら、ハトを見ていた。

デーデーポポー、デーデーポポー

ふいに群れの中の一匹と目が合った、気がした。そして。

デーデーポポー

スポットライトが消えたようにいきなり目の前が真っ暗になった。全てが、黒。あれだけたくさんいたハト達の姿も、全然見えない。

デーデーポポー、デーデーポポー

真っ暗な黒い空間に残された私に、ただそんなハトの声だけが聞こえてきた。

デーデーポー、デーデーポー、デーデー・・・

何度目かのハトの声と共に、急に目の前の世界がパツと色を取り戻

した。

ピカピカなフロアー。綺麗な調度品。ここは、夢屋。いつの間にか私は眠っていたらしい。そして夢を見ていたらしい。

『デーデーポポー』

夢の中と同じハトの音がする。ただ、今度は機械的だ。これは・・声の聞こえてきた方角に目をやる。

声の主は、東側の壁に取り付けられたハト時計だった。時刻は9時をさしており、ハトもその数字の分だけ鳴いた。

ハトが鳴き終わって、顔を時計の中に引っ込めたちようどその時。

「お待たせいたしました。」

(!?)

背後から声がした。急いで振り向くと、背の小さな老人が一人、立っていた。いつからそこにいたんだろう。ああ、びっくりした。

「お待たせいたしました」は、昨日の電話の声だった。これは間違いないだろう。

「すみません。うちは時間ぴったりがモットーです。」

老人は立ったまま話した。相手だけそうさせるのも悪いと思って、私はソファァーから立ち上がった。

「謝らないでください、ちようど今来たところなので・・」

なんとなく、嘘をついてしまった。

「そうですか。ではご案内します。こちらへ。」

老人はフロアーの奥にある大きな扉を指し示しながら言った。

すぐく大きな扉なのに、今になるまで全く存在に気付かなかった。

不思議だ。

私はあとについて歩いた。後ろから老人を見て気付いた。老人は右足が悪いらしく、なにか重い荷物でも引きづっているかのようにヒョコヒョコとした歩き方をした。

それでも不思議と惨めな感じはしない。貫禄というか、大げさにいうとオーラのようなものがある。

今日からこの人のもとで働くのかと思うと、私はなんだか誇らしい気持ちになった。

3. 顔合わせ

「まずは、今日こちらに来ていただいてありがとうございます。」

「そんな・・・こちらこそ。」

「何はともあれ、あなたはこれからうちの大事な社員です。よろしくお願いします。」

「・・・よろしくお願いします。」

「少し、待っていただけますか。」

老人はそう言うのと、またさっきの小部屋に入って、小さなダンボール箱を持って出てきた。

ソファーに座って、箱を傍らに置くと、老人はこう切り出した。

「夢屋とは、どんな仕事をしているとあなたは思いますか。」

「え・・・」

こんな質問をされるとは思わなかった。でも、これって大事な質問のような気がする。夢屋のイメージ・・・？夢屋の仕事って・・・？

「・・・よく・・・分からないです。」

正直に答えた。怒られるかと思ったけど、老人は、でしょうね、と言って頷いただけだった。余計な心配だった。

少し間をおいて、老人の瞳が急に力強くなり、そして言った。

「夢屋は、あなたの夢を探す・・・夢を見つけるのがお仕事です。」

「・・・？」

「もっと、分かりやすく言うと。」

「・・・??？」

「ここへ来るのは夢を見失った人々です。」

「・・・夢・・・を？」

「そうです。」

老人は私の質問に簡潔に答えた。すぐには理解できなかった。老人は、そんな私に考える時間を与えるように、またしばらく無言になった。

夢屋――・なんだかここは、ただの会社じゃない。普通じゃない。とにかくそれだけは分かる。つまり、私は夢を見失っている、というのだろうか。

頭の中で、聞きたいことがポンポン出てきたけど、その中の一番をとりあえず一つだけ聞いてみた。

「・・それで、私は何をすればいいんですか？」

「聞かれると思いましたよ。」

老人はそう言うと、傍らのダンボール箱をテーブルに置いた。そして一つ笑みを浮かべると、ゆっくりと、蓋を持ち上げてみせた。

このダンボール箱が、私に与えられる仕事と何の関係があるのだろうか。老人の思いもよらない行動に、私は少しまごついた。

「これを、どうぞ。」

(・・?)

老人は、箱の中から何か細長い筒のようなものを取り出して、私に手渡した。ただの筒じゃない。表面にカラフルな装飾が施されている。これは・・

「万華鏡？」

思わず口に出していた。

「そうです。よくご存知でしたね。」

老人は満足そうな表情で私と万華鏡を交互に見比べながら言った。万華鏡ぐらい、誰でも知っているだろう、と思ったけど、当然それは口にしないで、黙っていた。

「それは、私からのプレゼントです。」

・・まだ分からない。だから、私がする仕事は？とうとう声に出して聞いた。

「あの、この万華鏡と私の仕事と何の関係があるんですか？意味がわからないんですけど。」

ちよつと言い過ぎたかな、って思った。けど、疑問に思ってることがあやふやなままなのは嫌だ。老人の顔を直視して、答えを待った。「ただの万華鏡じゃありませんよ。それには、あなたの見失った夢

が入っています。」

「え・・・？」

「あなただけの万華鏡です。」

それが老人の答えらしかった。

まだ、100%全ては分からなかったけど、なぜかもう何も言えなかった。とりあえず、手に持った万華鏡をじっと見つめてみた。

「今は分からなくても、心配することはありません。そのうち自然といろんなことが分かってきますよ。」

その言葉に、思わず顔を上げると、老人と目が合った。本当ですか、と尋ねるかわりに、深い色の瞳を見つめた。

そうしてこの姿勢での最後の一言はこうだった。昨日の電話と同じように。

「何はともあれ、歓迎いたしますよ。ようこそ、夢屋へ。」

部屋から出ると、急に肩の力が抜けた。

なんとなく腕時計を見ると、まだ9時30分だった。もっと長いこと話してたと思ったから、ちょっとびっくりした。

でも老人はいい人だったし、意味は分からないけど万華鏡ももらえたし、一応は幸先のいいスタートを切ることができた、と思う。

しばらく部屋の入り口のところでブーツと突っ立っていた。なんか現実感がない。そういえば夢屋に入った時からそうだ。なんか空気のなかをただフワフワと漂っている感じ。でも、居心地は悪くない。どうしてだろう。

私がいつまでも突っ立ってるもんだから、それを見かねて部屋から老人が出てきた。

「お疲れですか。」

「・・・あ、すみません。そういう訳じゃないんですけど・・・」

「無理はしないでください。まあ、今日はまだ初日ですから、一通り見学なさってから帰られたらどうですか。」

「・・・あの、この建物すごく広いですね。びっくりしました。」

私がそう言うと、老人はハハハ、と笑った。声をだして笑うのは初めてだった。

「ここへ来る方、たいていそう言いますよ。」

「・・・そうですか。」

だろうな、と思う。でも顔には出さない。私はこうも言った。

「でも、人が誰もいませんね。」

本当にそうだった。夢屋に来てから、私はこの老人の姿しか見えない。現実感がないのはそのせいだろうか。今も、ロビーには相変わらず誰の姿もなかった。

「おや、それはまだこの階しか見てないからでしょう。上の階にはちゃんとうちの社員もいますよ。」

「!・・・本当ですか?」

「嘘はつきませんよ。」

老人はそう言って、また笑った。そうしてさっきの部屋とは逆方向にあるエレベーターを指し示した。

「気になるのでしたら、見ていってください。百聞は一見にしかず、ですよ。」

「・・・そうですね。行ってみます。」

他に人がいる・・・不思議な感じがした。まだ姿は見えないけど、他にも私と同じように夢を見失った人がいる。すぐにでも会いたくなかった。

私は老人の横をすり抜けてエレベーターへと向かった。老人は、行つてらっしゃい、と言いながら右手をひらひらさせた。

エレベーターに乗り込んで、さっきいた場所に目をやると、もう老人の姿はなくなっていた。

4. 社長老人の過去

「人が誰もいませんね。」

さっきそう言った私はなんだったんだろう。ここ、夢グッズ製作部らしい4階は、電話の鳴り響く音と、多くの社員達でこったがえしていた。

おとといまで私が勤めていた出版社なんかとは、まるで規模が違う。軽くショックを受けた。

ずっと入り口のところに突っ立っているのに、誰も気付かない。みんなすごく忙しそうだ。

とうとう、私は自分の方から社員の一人に声をかけてみた。

「あのー・・・今日新しく入った者です。ここ、見学してもいいですか・・・？」

緊張しながらも、周りの音にかき消されないように、できるだけ大きな声で言った。どうやら聞こえてくれたようで、声をかけた女の社員は、動きをとめて私の方を向いた。

ちょっとキツそうな感じの人だった。化粧が濃い。違う人にすればよかったかな・・・と思ったけど、声は優しかった。

「新人？ 見学？」

「は、はい。」

「ふーん、ちょっと待ってて。」

女の社員はそう言うのと、持っていた紙の束を、近くに居た別の社員に押し付けて、私のところまでやってきた。

「名前は？」

「田島です。田島桃子といいます。」

「他の部署はもう見たの？」

「いえ、まだです。いっぱいあるんで全部はまわれないかと思って・・・」

「そうね。一日じゃ無理、って私が保証しておくわ。うちの部の案

内しかできないけどそれでもいい？」

「！案内、してくださるんですか？」

「そんな、たいそうなものじゃないけどね。」

「ぜひお願いします！」

「いえ、こちらこそ。私は小阪っていうの。よろしくね。」

じゃ、ついて来て、と小阪さんは私の前に立って歩き出した。私は慌ててその後に続いた。

夢グッズ製作部は、主に3つの課からなっていた。

分け方は簡単にいうと性別。

まず一つ目は男性向けのグッズを作る課。作られているのはほとんどが携帯電話とかの通信機で、画面になんらかの夢が表示される仕組みになっているらしい。

それと対になるようにあるのが、女性向けのグッズを製作している課。こちらは結構バリエーションが広くて、いろんな種類の商品にそれぞれ夢がこめられているらしい。私がもらった万華鏡も、ここで作られたものだった。

そして最後がいわゆるお年より向けの課。小阪さんいわく、意外とこの年代のお客さんが一番多いらしい。若い時持っていた夢を、年をとってから思い出す人は結構多いんだそう。

「だいたい、どんな感じが分かったかしら？」

部屋を一周してきて、見学を終えて、小阪さんが言った。

「はい。ありがとうございます。」

私はぺこりと頭を下げた。ものすごく充実した気持ちだった。夢を与えたり、思い出させる商品を作るなんて、すごく素敵な仕事だと思う。素直にいいな、と思った。

下げた頭を戻そうとしたその時。

ググウ……

小阪さんに、昼ご飯までご馳走になってしまった。場所は7階の夢

屋食堂。ここはごく普通の食堂だった。

「なんか、すみません。何から何まで・・・」

割り箸でエビフライをつつきながら私が言った。

「いいのよ。新しいことをした後って、お腹がすくものでしょ。遠慮しないで食べて。」

「・・・すみません。」

すみませんじゃなくて、はい、でしょと言って小阪さんは笑った。きっと典型的な姉御タイプなんだろう。こんな先輩がいたらいいな、と思った。

「桃ちゃんは何歳？」

味噌汁のお椀を持ちながら小阪さんが言った。桃ちゃん？

私が困惑している表情をしているのが分かったのか、小阪さんは、

「あ、今私がつけたの。変かな？」と慌ててフォローを入れた。私は必死で首を横に振ってから、質問に答えた。

「23です。」

「ひゃー！若いねえ！羨ましいわー」

小阪さんは大きく目を見開いて言った。私ももう少し若ければなあ、とつぶやきながらも、とうとう自分の歳は言わなかった。

相手から聞かれてばかりもあれなので、少したって私の方から質問してみた。

「ここ・・・夢屋はあの老人の方が一人で経営してるんですか？」

私がそう言うと、小阪さんの表情が少し神妙になった。

「桃ちゃん、うちの社長に会ったのね？」

社長・・・？　そうか、確かに社長という呼び方があの老人のポジションには一番ぴったりに間違いない。

「会いました。」

「じゃ、右足が悪いのには気付いた？」

「・・・はい。」

小阪さんは、少し遠くを見つめてからぽつりぽつりと話し始めた。

「あのね桃ちゃん、社長がなんでこの夢屋をおこしたか分かる？」

「・・・いえ。」

「夢屋はね・・・社長の夢そのもののなの。」

「社長はね、昔水泳の選手だったんですって。かなりスジが良くて、いろんな大会で何回も優勝するほどだったそうよ。」

あの老人が水泳・・・なんか想像がつかなかった。

「本当に水泳が好きで好きで、たまらなかったみたい。幸せよね、自分の好きなことに才能があるって。」

私は何かにとりつかれたように黙って話を聞いていた。

「でも・・・そんな時、不幸が訪れた。学校から帰る途中、社長はトラックにはねられたの。」

「・・・！」

「幸い、命に別状はなかったんだけど、足の靭帯を切って・・・二度と泳ぐことのできない体になってしまったの。」

「・・・・・・」

「辛かったでしょうね。そんな形で自分の夢を諦めることになったんだから。しばらくは自殺も考えていたみたい。」

「・・・・・・」

「でも、社長はくじけなかった。確かに自分の夢は終わってしまっただけど、世の中には自分の夢に気付くことすら出来てない人もいる。そんな人達に夢を思い出してほしい、そのためには何が出来るか考えてたのね。」

「・・・・・・」

「そして、夢屋が出来上がったの。社長の新しい夢が形になったの。だからね、と小阪さんは続けた。」

「夢屋を経営してるのは社長一人だけど、そんな社長に救われた人はいっぱいいると思うわ。桃ちゃん、あなたもきつとそうなると思う。」

「・・・」

「だって、夢屋が見えるのはその必然性のある人だけだから。」

小阪さんはそう言ってようやく穏やかな表情に戻った。

社長の夢……

私は老人の笑顔を思い出していた。

初めて会った時、紅茶を飲んだ時、万華鏡を渡された時。

その笑顔の裏に、その笑顔にたどり着くまでにどれほどの苦悩があったのだろう。怖かっただろう、長かっただろう。苦しかっただろう。

私も……夢を思い出したい。

私は静かに、心の中でそう口にしていた。

5. 万華鏡の意味

昼食を終えて、小阪さんと1階のロビーに戻った。やっぱり、人はいなくて静かなままだった。

「いろいろ、ありがとうございました。」

私は改めて小阪さんにお礼を言った。夢屋の案内と、ご飯をおごってもらったことと、そして社長の話……目に見える形ではないけど、いろんなものを教えてもらった。

「いいえー、私なんかで役に立てたんなら嬉しいわー。」

小阪さんは、片手をパタパタさせるジェスチャーを交えながら言った。照れているのか、顔が少し赤くなっていた。こんな風にお礼を言われるのに慣れていないのかな、と思った。

2人並んで、入り口まで歩いた。なんとなく無言だった。あつという間に着いてしまった。

「じゃ、ここで。気をつけて帰ってね。午後も仕事あるから、たいした見送りもできなくてごめんね。」

「いえ、とんでもありません。すごく楽しかったです。本当にありがとうございました。」

軽く頭を下げてから、私は背をむけて歩き出した。自動ドアの前に差し掛かったとき、突然後ろから小阪さんの大きな声がした。

「がんばれよ、桃ちゃん！」

慌てて振り向くと、小阪さんは元気いっぱい笑顔で私を見つめていた。姿は小さくしか見えなかったけど、なぜか表情は手に取るように分かった。

私は返事のかわりに、右手を選手宣誓のように突き上げながら、自動ドアをくぐった。

（がんばります。）

そんな心の声は小阪さんには絶対に聞こえていないけど、私は自分に言い聞かせるように唱えた。

入り口を完全に出ると、午前中と同じ日差しが、私に眩しく照りつけてきた。

こんな微妙な時間に、電車に乗って帰るのは久しぶりだった。いや、初めてかもしれない。

こんな微妙な時間だからか、お客さんはあまりいなかった。乗っているのはだいたいがお年寄りか、スーパーのビニール袋をさげている主婦とかだった。

いつも乗っている電車なのになんとなく新鮮だった。静か。夢屋にいる時は全く感じなかった疲れが、今になってでてきた。すごく眠い。

しばらく睡魔と格闘した。ちょっと気を抜くと、本当に眠ってしまいそうになる。乗り過ごすわけにはいかない。ただでさえ金欠だ。90%近く睡魔に支配される状態になった時、駅についた。

電車から降りて外の空気に触れると、ようやく眠気がとれてきた。時計を見ると、2時過ぎだった。

（まだ、帰りたくないな。）

なぜかふとそう思った。時間が中途半端だとか、それだけが理由ではない。なんとなく本能的にそう思った。

駅の長椅子に座りながら、どうしようか考えた。帰りたくないけど、あまり人の多いところにも行きたくない。ワガママ？いや、そんなんじゃない。

人があまりいなくて、ここから近いところ…… そうだ。

風に吹かれながら歩くと、ふいに草のにおいがした。視界いっぱい広がる川は、暑い日ざしに照らされて、黄金色に輝いている。

（久しぶりに来たなあ。）

この川原は、私のお気に入りの場所だった。こんな風に、一人になりたくなった時……私はここへよく足を運んだ。もっとも、最近の仕事が忙しくて、来ることもめったになくなっていただけ。

小さく作られた階段の上に、腰を下ろす。ここからの眺めが一番いいことを私は知っている。

一人になりたい時は、いろいろあった。仕事でミスをしたり、友達とケンカしたり、隣の部屋の住人がうるさかったり。だけど、どんな時でも、ここへ来れば全てを忘れることができた。ここもまた、静かだった。

今日の私は静かなところに縁があるな、と思った。しばらく体育座りの姿勢になりながら、静寂を感じていた。

次第に、退屈になってきた。いつもここへ来る時は、本とかウォークマンを持ってくるんだけど、今日は成り行きで来たようなものだから、何も準備していなかった。

何かないかと思って、横に置いたカバンをこじ開けた。ふと、あるものが目にとまった。もう、渡されたことも忘れかけていた――万華鏡。

私は改めて万華鏡を手にとって、じっくり眺めてみた。夢グッズ製作部で作られた、この万華鏡。赤い布地に、青や緑の宝石が付けられている。外見は普通の万華鏡だった。

これの、どこに私の夢が入っているというのだろうか。そういえば、まだ中を覗いていなかった。私は万華鏡の筒を片目にくつつけて、くるくる回してみた。

(・・・?)

そこには、光の三原色からなるプリズム――そんなものは映っていないかった。

代わりに、なにか映画のような映像が見える。

場所は学校の教室のようだ。座っている生徒達は、小さい。おそらく小学1、2年生くらいだろう。その中、窓際の席に座っている一人の少女が目にとまった。

(・・・ええ・・・!?)

それは、小学生の私だった。間違いない。小学生の頃、私はクラス

で一番背が小さかった。随分、それがコンプレックスだったものだ。今映っている私も、ひととき周りの生徒達より小さく、目立っていた。

なんだって、こんなものが映っているんだろう。

私は、教室全体を細かく観察してみた。子供の数、全部で40人くらい。よく見ると、何人か覚えていた顔があった。昔のクラスメイト。やっぱりここは、私の小学生時代のようなだ。

黒板の前の教壇には、先生がいた。それで分かった。ここは小学2年生の教室だ。今でも先生の名前をフルネームで言える。佐々木みどり、といった。とてもいい先生で、3年生になって担任が変わる時には、悲しくて泣いたほどだ。

懐かしくてしばらく先生を見ていた。さっきまで感じていた疑問も、先生を見ているうちに少しずつ薄らいでいった。私が見ている先生は、生徒達を見ていた。全員をくまなく眺めて、先生が急に喋った。「みんな、そろそろ出来ましたかー？」

先生が言うと、生徒達は小学生低学年ならではの元気すぎる声で、はーい、と声を張り上げた。

出来る・・・？何がだろう。何の授業？

先生の後ろの黒板を見てみた。そこには、チョークの白い字で、「生活科　じぶんだけのおはなし作り」と書いてあった。

これ・・・はー・・・私の体がドクン、と波打った。

私は小さい頃から、本が好きな子供だった。

昔、まだ幼稚園にも行っていないほど小さかった頃、私は寝る前にいつも母に絵本を読んでもらっていた。

ピーターパンやシンデレラのような定番作をはじめ、アニメや日本昔話など、幅広く読んでもらった。私の傍には、気がつくといつも何らかの本があったように思う。

幼稚園に通い始めると、ノートに詩を書くようになった。詩というよりは、自分がその時思った気持ちなんかをただ書きなぐっただけ

のものだったけど、私はそれが楽しかった。

同じ組の他の子達は、もっぱら絵ばかり描いていた。だけど、私は詩だった。自分を表現する一番の方法は、文字だったのだ。

大きくなってから、母によくこの頃のことを聞かされた。あんたは、他の子と違う事ばかりしていたわ、時々心配になったわ、と。

周りとは自分が違うことは、そんなに悪いことなのだろうか。みんなと同じ、みんなに合わせることは、そんなに正しいことなのだろうか。

私はそうは思わない。みんなと違うから、自分にしかないものだからこそ、それはとても大切なものなんじゃないだろうか。もっと分かりやすく言えば、それは個性だ。

それは、どんなに努力しても手に入らない。高価な宝石のようなものだ。

・・ずっと、そんな気持ちを忘れていた気がする。昔はあれだけ強く思った気持ちなのに。私は何か忘れている。何か・・・

先生が一人ずつ指名するたびに、生徒達は一人ずつ自分の作品を発表していった。

「じぶんだけのおはなし作り」は、いわゆる物語を作るものだった。生活科の授業でこんなのがあったことを、私はやっと思い出していた。

いろんな物語があった。それは小学2年生の作る、つたない物語だったけど、一つ一つに不思議な魅力があった。私は久しぶりにワクワクした、充実した気持ちを味わっていた。

廊下側の席の一番前の生徒から始まって、発表はほぼ教室を一周してきた。私の番になった。心臓が一際大きく鳴った。

教室中の視線が私に集まる。小学2年生の私は、ゆっくりと物語を語り始めた。

昔昔、ある森に一匹の熊が住んでいました。熊は食べ物にも寝床にも不自由していなかったけど、友達がいないという悩みがあったの

です。

ある日、熊は食べると数時間だけ人間の姿になれるという、木の実のなっている木が森にあることを知りました。熊はその木を見つけ出し、木の実を一口食べると、人間の男の子の姿になりました。

そのまま森の中を歩いていると、散歩に来ていた一人の少年に出会いました。二人は意気投合し、たちまち仲良くなりました。生まれて初めて友達ができた熊は、嬉しくてたまりませんでした。

しかし、幸せは長くは続きませんでした。熊が友達になった少年は、猟師の子供だったのです。数日後、狩に来た少年に熊は撃たれてしまいました。

倒れて血を流しながら、熊はそれでも少年を恨みはしませんでした。ただ、もう一度木の実を食べて、人間の姿になったなら、少年に伝えたい。友達になってくれて、ありがとう、とー・・・そんな物語だった。

しばらく教室は静かだった。あまりにも暗い話だった。他の生徒の時は、発表し終わったらすぐにみんなが拍手をしたのに、それもなかった。

静寂に教室のほとんどが包まれそうになった時、一人の生徒が手をパチパチと叩いた。

「田島さん、すごくおもしろかったよ！」

(え・・?)

その子につられるようにして、一人、また一人、手を叩き始めた。それはやがて、大喝采になって、さっきまでの静寂の変わりに教室中に鳴り響いた。

「田島さん、すごい！」

「ほんとに、おもしろかったよ！」

拍手と一緒に、そんな声があちらこちらから聞こえてきた。どうしたらいいか分からなくてまごついたけど、私は嬉しかった。

小学生の私も、今万華鏡を覗いている私も、心底ホッとしていた。拍手は長く続いた。ようやく鳴り終わると、先生が笑顔で、「田島

さんは、小さな小説家だね。」と言った。

私は溢れんばかりの笑顔になった。そこで万華鏡の映像は途切れた。真っ暗になって、何も見えなくなり、私はゆっくり万華鏡を顔から離れた。しばらくそこから動くことができなかった。

6. 回想1／友達／

アパートの自分の部屋に帰ると、メイクも落とさないでベッドに横になった。いろいろありすぎて、どう気持ちの整理をつけたらいいか分からなかった。

枕に押し付けていた顔を半回転させて、天井の方を向いた。考え事をするにはこちらの姿勢のほうがいいと思ったのだ。

あの映像……。カバンから万華鏡を取り出して、覗く。もう何も映らない。一瞬、あれは幻だったんじゃないかと思った。

だって、そんなばかな話があるだろうか。こんななんでもない小さな筒に、小学生の私が映っていたなんて。

でも・・

『それには、あなたの見失った夢が入っています』

老人の言った言葉が頭をよぎった。

私の、夢、はー・・

数分後、私はあるものを探そうと、部屋の小さな押入れを漁っていた。

どこかでもらった石鹸の詰め合わせとか、買ったきりで一度も着ていないワンピースとかどうでもいいものばかり出てくる。

もしかしたら実家に置いてきたままだったかな、と不安になった時、ようやく「それ」を見つけた。

表紙についたホコリをぬぐう。中学のー・・卒業アルバム。

散らかった部屋を片付けることもしないで、私はゆっくりとアルバムのページをめくった。

校長、職員紹介なんかのお決まりのページの後に、クラスごとの写真が載っている。卒業から何年かたって、私は自分がどの組だったかもうすぐには思い出せない。

いや、探しているのは私の写真じゃない。この中のどこかにいるー・

生徒の顔を一人ずつ丹念に見ていく。制服を着ているからか、皆似たようなものだ。それが余計に彼女を探し出すのを困難にさせる。写真を指でたどる。そうして・・

見つけた。彼女は4組にいた。

顔写真の下には、池田 亜季と書いてある。

亜季とは、中学に入ってから知り合った。

私達は中1でいきなり同じクラスになった。でも、出席番号も離れていて席が近いわけでもなかったし、なにより40数名もいるクラスだから、特に話す機会もなかった。

中学に入ってしばらくは、小学校の時の友達と行動していた。そんなふうにして、クラスには自然にいくつかのグループができていた。それぞれのテリトリー。誰しも、誰かと一緒にいることで、自分を守っているような気がした。

そんな中で、亜季はいつも一人だった。本当に友達がいなかったのか、あるいは友達を作ろうとしないのかは分からないけど、私はだんだんとそんな彼女が気になるようになってきた。

何か話しかけたかったけど、なかなかその勇氣は出なかった。ずっとこんな状態が続くかと思った時、きっかけが訪れた。

中学に入学して1ヶ月、私は文芸部に入ろうと思っていた。できれば、友達と一緒にの部が良かったけど、みんなテニス部やら吹奏楽部やらの華やかな部に入ってしまったて、私は仕方なく一人で入部届を出しに行った。

校舎3階にある部室。階段を駆け上がって、私はその前に誰かがいるのに気付いた。亜季だった。

亜季は扉の前で、何をするでもなくただ静かに立っていた。思わず何分か彼女を見つめていたけど、ずっとそのままだった。

(・・・?)

なんとなく、近寄りがたいふいんきだった。でも、とりあえず入部

届は出さないといけないし、なんとなくこれはチャンスだと思った。亜季と話したい。もう、ここを逃したらチャンスはないかもしれない。

私はそろそろと亜季に近づいた。そしてできるだけ自然に見えるように、話しかけた。

「池田さん、だよね・・・？」

亜季はいきなり声をかけられてびっくりしたのか、ハッとした様子で振り向いた。こんなに近くで彼女を見るのは、初めてだった。

少し、沈黙が流れた。嫌な沈黙。亜季は少し困った表情をした。その表情のまま、亜季は言った。

「すいません、・・・誰ですか？」

今度は私がびっくりする番だった。でも、無理もないか。

「田島です。田島桃子。同じクラスの。」

なんとなく、敬語。

亜季は私の言葉を聞いて、ようやく分かったようだった。スッと困惑の表情が消えていった。

「ごめんなさい、私、物覚えが悪くて・・・」

「あ、いいの、気にしないで。」

無理もない。

私が一方的に亜季のことを気にしてたんだから。亜季からしたら、私はただのクラスメイトにすぎない。

それがちよつと悲しくもあったけど。

「何してるの？」

私がそう言うと、亜季はまた無言になってしまった。私ではなく、私の足元の床を見て、もじもじ恥ずかしそうにしている。

聞かなければよかったかな、と少し後悔した。聞かれたくないことだったのかな。

ふと、亜季が何か握り締めているのに気付いた。白い紙のようだ。すぐく力を入れて握っているのか、しわくちゃになっている。

それでもすぐに分かった。私が今手に持っているのと、同じものだ

ったから。それはつまりー・・・

「文芸部に入りたいの？」

先生のような口調になってしまった。亜季が目線を上げて、私を見る。なんで分かったの、とでも言いたげな顔だった。

「それ、入部届だね？」

亜季の疑問に答えるようにして言った。亜季は少し間をおいてから、小さく頷いた。

「先生に出さないの？」

亜季が喋らないので、一方的に質問するばかりになってしまう。そんな風に思った時、ようやく亜季が口を開いた。

「出したいんだけど・・・」

「うん？」

「一人じゃ、怖くて・・・」

「え・・・」

亜季のその言葉に、私は気がつくと大声で笑ってしまった。それこそ、廊下中に響くんじゃないかってくらいに。

「ち、ちよつと田島さん・・・」

亜季が慌てて笑い声を止めようとする。亜季に失礼とは分かっているけど、私はなかなか笑い終わることができなかった。

少しずつ、少しずつ、笑い声を小さくしていった。ようやく普通の状態に戻る。それを待っていたかのように、亜季が呟いた。

「やっぱり、変だね。おかしいよね。こんな子供みたいなこと・・・」

「

亜季は泣きそうだった。本当に泣くことはないと分かっているけど、私はしまった、と思った。

亜季は真面目なのだ。私にとってはなんでもない一人で入部届を出す、ということが、亜季には大きなハンデなのだ。

それを私は笑ってしまった。亜季の言葉通り、変で、おかしいとも言えるように。

でも、取り消すことはできない。亜季と仲良くなりたい。もう一度、

この状況から始めよう、と思った。

「そんなことない！」

「え・・・」

「おかしくなんて、ないよ。」

さっきまで笑っていたくせに、あまり説得力はないかもしれないけど、私は力をこめて言った。

「私も、一人なんだ。」

「・・・？」

「文芸部、入りたくて。」

そう言って、自分の入部届をヒラヒラさせながら亜季に見せた。分かるかな、私の気持ち。

「よかったら、一緒に入らない？」

亜季は目をぱちくりさせている。えーと、だからつまりそうなんですよ。

「友達に、なろうよ。」

それが始まりだった。

7. 回想2（親友）

友達になるきっかけなんて、ささいなものだ。

でも、私と亜季の場合はそんな風だったから、ちょっと変わってたのかな、と今では思う。

まあとにかくそんな訳で、私達は晴れて（？）文芸部に入部したのだった。

入部届を出した日、私と亜季は一緒に学校から帰った。歩きながら話す話題は、自然と本の話になった。

私が文芸部に入ろうと思ったのは、本や書くことが好きだからで、亜季もそれは同じだった。共通の話題ができたのが良かったのか、私達はいつの間にか自然に会話するようになっていた。

なんとなく安心して、もう打ち明けてもいいかな、と思った。

「私ね、いつも池田さんのこと見てたんだよ。いつも一人でいるから、気になってた。」

いつも見てた、なんて気持ち悪いかな、なんて心配だったけど、亜季は全然嫌な顔をしなかった。心底驚いてはいたけど。

「全然、知らなかった。」

亜季は大きな目を更に大きくさせて言った。

「でも、嬉しい。」

「ホント？」

「うん、ずっと友達いなかったから。」

亜季の言う「ずっと」とは、中学に入ってからのことだけではなかった。

彼女は話してくれた。小さい頃から、内気な性格で、人と話すのが苦手だったこと。小学校では、その性格ゆえに友達ができないばかりか、いじめられたりもしたこと。

おそらく、そんな体験を誰かに話すのは初めてらしかった。そんな体験を聞く、初めての誰かになれたことが私は嬉しかった。

「でも、不思議だね。田島さんとはなんか普通に話せる。」

話し終わった亜季が、そう呟いた。

帰り道の夕日に照らされてほんのり浮かぶ、彼女の横顔を見ながら、私は言った。

「そんなもんだよ、友達って。」

そんなもん・・・どんなもんかは私にもよく分からなかったけど。

亜季の横顔がこちらの方に傾いて、「そっか。」と言った。

そうして、私と亜季は公認の友達になった。

まさか、あんな事になるなんてその時の私達には、知る由もなかった。

文芸部にはほとんど毎日2人で顔を出した。

さすがに中学のちゃんとした部活だけあって、小学生の頃、気の向くままに詩やお話を書きなぐっていた私には、一種のカルチャーショックだった。

学校にいる時間のほとんどは、亜季という時間でもあった。

毎日一緒にいる私達は、いつしか親友にまでなっていた。呼び方も「池田さん」から「亜季」に、「田島さん」から「桃子」に、変わっていった。

亜季に新しい風が吹けばいいな、と思って、小学生の頃の友達を紹介したりもした。

初めは私の影に隠れるようにして怯えていた彼女も、次第に少しずつみんなと打ち溶け合っていた。初めて多くの友達ができた亜季は、幸せそうな笑顔だった。

「池田さんってさー、可愛いよね。」

ある日、いつものグループで昼食をとっていると、友達の1人が唐突に言った。

その時、亜季は何かの用事で、席にはいなかった。何の用事だっただろう？とにかく、ここにはいなかった。

本人のいない時だったから、自然とそんな話になったんだろうか。その1人の発言に、みんなが吸い寄せられていた。

「可愛いつていうかー、美人系？」

「そうそう、マジ綺麗だよねー。なんかしてんのかなー？」

引き金になったように、ポンポンみんなが口にし始める。

亜季「美人。みんなが、前々から思っていたようだった。もちろん、私も。」

もともと亜季は美人だった。目はパッチリしていて、まつ毛が長く、髪は綺麗な栗色。身長も160cmと中1にしては高くて、スタイルも良かった。

教室に1人でいる亜季を見ている時から、綺麗な子だと思っていた。でも、私が亜季と友達になりたいと思ったのは、それが原因ではなかったけど。

もともと美人な亜季だったけど、私やグループの皆という友達が出来てからは、表情も明るくなって、どんどん綺麗になっていった。少し早目の、高校デビューとでも言おうか。

更に言うと、そんな彼女のもっと好印象なところは、自分が美人で綺麗だなんて全く思っていないところだった。気付いていないところだった。

誰かに面と向かって、そう言われた事などないのだろうか。でも、亜季のことだから言われたとしても、その言葉を信じることはきつとないだろう。

亜季が戻ってくるまで、そんな話が続いた。

しばらくして、彼女が戻った時には、皆、いつものクラスメイトの顔になっていた。

それでも、何となくいつもと違う空気を感じ取ったのか、亜季が小声で私に尋ねてきた。

「なんの、話してたの？」

私は亜季の顔を見た。相変わらず綺麗で、相変わらずそんなことなど全然気付いていない顔だった。

「別に。なんでもないよ。」

「・・・そう？」

亜季は私のそっけない返事を、いつも通りに受け取ったようだった。慌てて遅れた昼食を食べ始めた彼女を眺めながら、私は体の中に、黒い渦のような感情が湧き上がってくるのを、感じていた。

一人、感じていた。

中学生といっても、もう誰かと付き合ったりするいわゆるカップルは結構普通にいる。

中1のバレンタインに告白して、それから付き合い始めるというパターンが一番多いらしい。

ある日、文芸部で作品にとりかかっていると、ふいに先輩が教えてくれた。

文芸部では、こんな風に雑談というかどうでもいい話が出てくることがよくあった。いつもなら軽く聞き流す私だったけど、その日は何かに吸い寄せられるようにして、その話を熱心に聞いていた。

理由はもちろんあった。

その頃、私は片思い中だった。相手は、同じクラスのサッカー部の生徒。ちょうど3階にある、文芸部の部室からサッカー部の活動しているグラウンドが良く見える。

サッカー部はかなり人気があるから、部員もたくさんいるのに、その中でも彼は目立っていた。もちろん見た目もいいし、それだけで人目をひくけど、目立っている一番の理由は、とてもサッカーが上手いことだった。

ちょうどそんな時だったから、先輩が何気なしに始めたその話に、思わずドキッとしてしまった。

女の子達は甘いものや、テレビドラマと同じくらい、いやそれ以上に恋の話題が大好きだ。一人が始めた話だったのに、いつの間にかそれはバーゲンセールのような盛り上がりになっていた。部室の隅の方に、人数の少ない男子部員が怯えるようにして固まっていた。

できることなら、私だって話に加わりたかったけど、もうその頃は誰が誰に向かって喋っているのか分からないくらい、めっちゃな騒ぎになっていたので、ただ遠くからぼんやりとその様子を眺めていた。

ふと、隣で詩を書いている亜季を見ると、彼女は全く向こうの話に興味がないようだった。いつも通り、熱心に詩を書いている。

亜季こそ、こんなに美人だから誰かに告白されて付き合う可能性だって、私なんかより十分にあるだろうに、すっかり作業に没頭していて、人の話す声さえもまるで聞こえていないようだ。

（亜季は、いるのかな、好きな人。）

なんとなく、そんな疑問が頭に浮かんだ。

せっかく集中している亜季を邪魔したくはなかったけど、これだけは聞いてみようと思った。

「亜季」

沈黙。

「亜季」

沈黙。

「亜季！」

「・・・え、何？桃子」

3回目の呼びかけで、ようやく亜季は現実に戻ってきた。相当熱中していたようだ。

「詩だったら、もうすぐ完成するよ。あとで見せ合いっこしようね。」

亜季は私の思惑とは、まるでとんちんかんなことを言った。もうそんな言葉を聞いたなら、質問の答えだって容易に想像できそうだったけど、私は一応聞いてみた。

「あかさ、亜季。」

「うん？」

「・・・好きな人、いる？」

亜季と恋の話をするのなんて初めてだった。私はなんとなく緊張し

ていた。

「いるよ。」

「・・・！？ホントに？」

「うん、桃子の事好きだよ。」

ひっくり返りそうになった。

「ちーがーう！」

一体、どこまで鈍感なんだろう、この子は。

「そういう好きじゃなくなつて、・・・好きな男の子いるか、ってこと！」

思わず人差し指で、亜季の方を指し示しながら、私は言った。小学生でも意味の分かるような質問なのに。

少し考える仕草をして、

「それは、いないかなあ。」

と亜季は言った。ボケた老人の独り言のように間の抜けた声だった。まあ、そうだろうな。

「なんで、そんなこと聞くの？」

「うーうん？ちよつと気になっただけ。」

先輩の話を説明するのは面倒くさかったので、自分で勝手に答えを作って返した。本当に亜季、何も聞いてなかったんだなあ。

「桃子はいるの？好きな男の子。」

唐突に亜季が聞いた。もうこの話題は終わるかと思っていたので、ちよつと頭が混乱した。

「いるんだったら、相談、のるよ？」

満面の笑顔で亜季が言った。いつも通りの私が好きな亜季の笑顔だった。

「・・・相談、のってくれる？」

「だから、そう言ってるじゃん。」

じゃあ・・・

「私ね、サッカー部の・・・」

「告白、すればいいのに。」

片思いを打ち明けて以来、亜季はよくそう言った。

好きな男の子もいない彼女なのに、私の恋愛に関しては、ことさら積極的だった。

「そんなの・・無理だよ。」

亜季にそう言われるたびに、私はこう返した。いつの間にかこのパターンの会話が定着しつつあった。

彼はかっこよくて、サッカーも上手くて、とても人気がある。告白したって、振られるに決まってる。それが私の持論。

「そんなの、やってみないと分かんないじゃない。」

「やってみなくても・・分かるよ。」

私がネガティブなことを言うたびに、亜季は頬を膨らませて、「もう。」と怒った。そんな亜季の顔もたまらなく可愛いなーと私は呑気なことを考えていた。

そんなこんなで季節はめぐって、いつしか中1の3学期になっていた。

こう書くと、あっという間に3学期になったと思うかもしれないけど、当然その間亜季とはいろいろあった。

文芸部での活動、初めて2人で計画して行った夏休み旅行、2人一緒に迎えた新年の初詣・・

その1つ1つが宝物だった。不思議だけど、小学生の時だって友達はいっぱいいいて、いろんな事をしたのに、亜季と過ごした時間はそのどれよりも輝いていた。

本当に楽しかった。本当に幸せだった。

そんな幸せがあっけなく壊れてしまうものだなんて、まだ私は知らなかった。

8. 回想3（嘘）

1・・・3学期になって、文芸部では、毎年恒例のコンクールに向けての作品を部員全員が製作することになった。

毎年恒例といっても、1年生の私達には初めての体験。緊張とワクワクが入り混じった何ともいえない気持ちで、私は味わっていた。

このコンクールというのが、何やら結構本格的らしくて、大賞は賞金50万円。運がよければ、作品の映像化などもあるらしい。それ位規模の大きいコンテストだから、応募も全国から集まってくる。

まあ大賞は無理だろうけど、奨励賞ぐらいには入れたらいいね、って亜季と話していた。

私も亜季も、コンクールには小説を出すことにした。

毎日、気が遠くなるほど文字を書き続けた。いつもはおしゃべりばかりしている先輩達も、この時ばかりは真剣らしかった。毎日、放課後の部室には緊張感と静寂が流れた。

私の書いている小説は、かなりの長編になりそうだった。毎日結構な量を書いているのに、なかなか結末が見えてこない。コンクールの締め切りが近づいていた。

「でーきたー！」

作品に取り掛かってから2週間後。

亜季が原稿用紙の束を、両手で掲げながら言った。横から見ると、束はかなり分厚い。

「え、マジで？できたの？」

思わずそう言ってしまった。なんとなく焦る。

「なんとかね。2週間もかかるとは思わなかった」

2週間もって、そしたらその2週間を費やしてもまだ完成していない私はどうなるんだ。

私は下を見つめたまま、しゅん、となってしまうた。我ながらかな

り暗い気分・

落ち込んでしまった私に亜季が気付いて、慌ててフォローを入れた。

「焦ることないよ！桃子。書き続ければ、絶対完成するから！」

そんなこと誰でも分かっている。だけど、そんな分かっていることしかフォローできない亜季が私は好きだ。

「・・そうだね。頑張る。」

「そうだよ。その意気だよ！」

亜季が、小さくガッツポーズをしてみせた。返事の代わりに苦笑でそれに答える。

原稿を先生に提出しに行った亜季を尻目に、私も完成にむけて再びペンを進めた。亜季と違って、ペースの遅い私だけど、書くことが好きだという気持ちは同じだ。だから、頑張れる。

何分かして、亜季が戻ってきた。一仕事終えた、達成感のある表情をしている。私は、まだ一仕事残っている。

「私、もう少し居残りして書くよ。亜季、先に帰ってて？」

「いいの？」

「うん、早く完成させたいし。できたら、亜季にも見せるから。」

「・・分かった。じゃ、頑張ってるね。」

亜季はそう言って、一人で部室を出て行った。部室には、ぽつぽつと数人の生徒だけが残された。

その日、ぎりぎりの時間まで残って、執筆を進めた。時間はかかってもいいから、自分で納得のいく作品にしたかった。

今までで一番作業がはかどった。おぼろげにしか見えていなかった、ストーリーの構造もはっきりしてきた。完成まであと少しだ。

気分がのってきたところで、下校時刻になってしまった。それでも気分はすっかりすっきりしていた。

亜季帰ろう、と声をかけようとして、彼女がいないことを思い出した。もう習慣になっちゃってるんだな、と笑いそうになった。

1月も終わりだ。外はだいぶ暗くなっている。

早く帰ろう、と部室のドアを勢いよく開けて・・私は寿命が縮ま

るかと思った。

サッカー部員でクラスメイトで。つまり。片思いの彼が、そこに立っていた。

彼の名前は、黒木周平という。もう何度心の中で、その名前を唱えたか分らない。漢字でフルネームを書けと言われても、いつだって大丈夫だ。

彼の方は、私のことなんてほとんど知らないだろう。これだけ黒木君のことを想っているのに、私は彼と話したことすらないのだ。

だからその日、部室の前に彼が立っていたのは、私にとってものすごい大事件だったのだ。

私はしばらく部室のドアを開けた姿勢のまま固まった。黒木君という魔法が、私の体を動けないようにしていた。

もちろん、ただ立っているだけでは（まあちょっとは驚くけど）ここまでパニックにはならない。私を動揺させている、もう一つの理由は、黒木君が確実に私を見つめていることだった。

顔がカーッと熱くなった。ゆでダコみたいになっているかもしれない。彼に気付かれたらどうしよう・・・

黒木君は、私を見ているというより、私の目を見ていた。なんでこんなことになってるんだろう。部活を頑張った私への、神様からの褒美？

永遠にも感じられたその時間、沈黙を破ったのは黒木君だった。彼は私の方に静かに歩み寄ると、

「田島さん、ちょっといいかな・・・？」

ここじゃ話しづらいから、場所を変えようと黒木君が言ったので、私達は学校を出て、近くの公園に来ていた。

学校の中でも良かったんだけど、先生達が一斉に下校指導をしていたので、いつまでも校内には残れなかったのだ。

私達は二つあるブランコに一つずつ並んで腰掛けた。軽く動くだけ

でも、鎖がキイキイと鳴る。

私は、今までの人生で、おそらくトップ3に入るんじゃないかってくらい、心臓がドキドキしていた。

この時間。この場所。このシチュエーション。人の多いところでは話しづらいという黒木君の言葉。

まさか・・・そんなことってある？話したこともないのに。何の接点もなかったのに。

でも・・・この状況での話なんてつまり・・・

「告白」しかないだろう・・・

ブランコに腰掛けてからの時間が長かった。

静寂が続く。そーっと、黒木君の横顔を見てみると、深呼吸をしたり、思いつめた表情をしたりしていた。話し始めるタイミングが、つかめないようだった。

だからと言って、私の方から切り出す勇気もなかった。図々しいと思われたら嫌だし、こういう時はやっぱり女は待つべきかなーという、変なポリシーがあった。

どれくらいの時間が流れただろうか？

夜風が冷たく感じ始められたころ、ようやく黒木君が口を開いた。

「・・・田島さん。」

「は、はい。」

「今日、こんな時間に呼び出したのは・・・」

黒木君は、そこまで言って、一度口をつぐんだ。私の心臓はもう爆発寸前だ。・・・神様！

「・・・池田さんのことなんだけど・・・」

(!?)

「・・・あ・・・き・・・のこと・・・？」

声がかすれた。いきなり予想だにしない名前が出てきて、私は体の力がいっぺんに抜けた。

「・・・そうなんだ。亜季って呼んでるんだ？やっぱり、仲いいんだね。」

私は黒木君のその言葉を、はるか遠くで聞いていた。告白？何をうぬぼれたこと考えていたんだろう。そうだよ、黒木君が私を好きになるような理由がどこにあるというのだろう。

少し考えれば分かることだけに、私は恥ずかしさで死んでしまいたくなった。

かなりの努力をして、無理やり気力を振り絞ると、私は平静を装って、言った。

「亜季は親友だけど・・・どうかしたの？」

黒木君は、少しためらった様子だったが、やがて意を決したように言った。

「俺・・・池田さんのこと・・・好き・・・なんだ。」

アルバムのページをめくる。黒木君の写真を見つける。

亜季と黒木君。もしかしたら付き合うことになるかもしれない二人。

だけど、それは現実にならなかった。いや、させなかった。

この時からだった、歯車が狂い始めたのは・・・

黒木君の話は、亜季と仲のいい私に、それとなく亜季の気持ちを聞いてほしいというものだった。

気持ちを聞くとと言っても、黒木君の名前は出さないで、好きな人があるかないか、それを聞いてくれないかと言うのだ。

そんなの・・・なんで私に頼むんだよ。私の気持ちはどうなるんだよ。そして、亜季の気持ちは・・・もう分かりきったことだ。

コンクルの作品が仕上がった。でも気持ちは全く晴れなかった。決して不満の残る作品になった訳じゃない、むしろ自分で納得のいく出来だ。

それでも、昨日の話は私にとってあまりにショッキングすぎた。私が思いつめた表情をしているのが分かったのか、亜季が心配そう

に話しかけてきた。

「桃子、大丈夫？　なんか顔色悪くない？」

「え・・・そんなことないよ、作品仕上げるのに徹夜しちゃっただけ。」

「そう？　あんまり無理しないでね。」

亜季はまだ何も知らない。親友の片思いの相手が、自分を好きだということ。

どうやって話そう？

亜季に好きな人がいないというのは、例によって以前話したことがあるから、私も知っている。

でも、だったらなおさら黒木君の気持ちはちゃんと話しておいたほうがいいだろう。

亜季はどんな顔をするだろう？　驚き、喜び、悲しみ・・・？

・・・考えたくない。

私は通学カバンを乱暴に手に取った。もう耐えられない。

「桃子？」

「ゴメン・・・なんかちょっと疲れた・・・先、帰るね。」

亜季の顔も見ないで、私は逃げるようにしてそこから駆け出した。このまま亜季といったら、自分が壊れてしまいそうだった。

神様は、残酷だ。なんで黒木君なの？　なんで亜季なの？　私、どうしたらいいの？

家に着くまでずっと走った。

帰ると、部屋に閉じこもった。少しずつ気持ちを落ち着けて、考える。

私は黒木君が好き。それは恋という名の感情。

亜季のことも好き。それは友情という名の感情。

2人の事が、どちらも好き。どちらの方が重いのかなんて、考えたこともない。天秤なんかで量れる気持ちじゃない。

ずっと、2人のことを見ていたい。2人の笑顔を見ていたい。

そのためにはどうするのが一番いいかなんて、本当はとづくに分か
ってる。分かってるのに……

私はゆっくり起き上がると、机の引き出しから紙とペンを取り出し
た。私は、何をしようとしているの？

その時、私は以前感じた……あの黒い渦が体の底から沸いてくる
のを抑えることができなかった。

何かに操られるかのように、ペンを走らせる。

『黒木君へ

亜季のことでお話があります。昼休み、学校の屋上へ来てくださ
い』

風が強い。

屋上に出て、最初に感じた。

違う場所にしたほうが良かったかもしれない、と思った。ただでさ
え、今の私はうまくバランスをとれていない状態で、いつ転げ落ち
てしまうか分からない。

屋上には、昼休みということもあって、結構わらわらと人がいた。
それが、少し私の気持ちを落ち着かせてくれる。

今日の朝、黒木君の靴箱に手紙を入れた。昨日書いた、短い手紙。
手紙で告白することだって、十分にできた。でも、もう私は黒木君
の気持ちを知ってしまった。

もうこんな形の手紙しか、書くことはできない……

「田島さん」

来た。

手すりにもたれかかった姿勢から黒木君の方に向き直る。彼の姿が
目に入ると、急に緊張の波が押し寄せてきた。

私は残酷な事をしようとしている。まだ誰もその事を知らない。人
を殺す犯罪者の気持ちになった。

「ごめん、遅れて。」

黒木君は、肩で息をしながら、それでも目には期待の色を輝かせて

いた。胸がちくり、と痛む。

「ううん、私も今来たところ。」

かろうじて声は震えなかった。しっかりしろ、私。

デートの待ち合わせのような会話だと思った。本当にデートだったらよかったのに。

それは永遠に叶わない。――絶対、叶わない。

黒木君の提案で、人のあまりいない隅の方へ移動した。喋る声もなんとなく小さい。

2人並んで、しばらく景色を眺めた。この前とは違って、今度は私の方から切り出さなくてはならない。かなり辛い。とうとう私は意を決して、最初の一言を口にした。

「亜季に、聞いてみた。気持ち。」

黒木君が、視線を景色から私の方に移した。驚くくらいの速さだった。

「それで・・・俺の事は・・・」

「あ、それは大丈夫。黒木君の名前は出してないから。」

「そっか・・・それなら良かった・・・」

黒木君は心底ホッとした様子だった。かっこいいし、サッカーも上手いし、女の子に人気もあるのに、意外と奥手なんだな、と思った。

「それで・・・池田さん何て・・・？」

「・・・・・・」

手が汗ばむ。怖い。今ならまだ引き返せる。本当のことを言える。でも――

「・・・田島さん？」

私は、黒木君の方をしっかりと向いた。――ごめん、亜季。

「亜季・・・好きな人がいるって・・・」

黒木君の表情が凍りついた。さっきまで期待に輝かせていた目は、絶望で真っ暗になっていた。

私は下を向いた。とても、黒木君のそんな顔を見ていられなかった。遠くから聞こえる、鳥や生徒達の声も、冷たく感じられた。

恐ろしいほどの沈黙が続いた。今、黒木君はどんな顔をしているのだろう？まだ、前を向くことができなかった。

沈黙に飲み込まれそうになった時、黒木君が口を開いた。

「そっか！そうだよなあ。好きな人くらいいるよなあ。」

（え・・・？）

「ゴメン！田島さん、この話は忘れて？嫌な役、させちゃって悪かったな。」

私はゆっくりと顔を上げた。黒木君は、もういつもの明るい笑顔に戻っていた。

「じゃ、それだけだから。本当、ありがとな。」

カラッとした声だった。黒木君はそう言うのと、さっさと屋上の入り口まで歩いていった。あまりにもあっけなくて、私はポカンとしていた。

黒木君の姿が見えなくなると、私はその場にヘナヘナとしやがみ込んだ。

終わった。何もかも。

（・・・これで良かったんだ。）

（私は・・・何も知らない。）

自然と涙が溢れる。私はそのままうずくまるようにして、声を出さずに泣いた。

（私は・・・最低・・・）

9. 回想4（ニュース）

しばらく亜季の顔を見るのが辛かった。

私は絶対にしてはいけない事をしてしまったのだ。悪魔は天使に勝つことができなかった。

バカな私。亜季と黒木君を引き離れたからといって、黒木君が私と付き合ってくれるわけじゃないのに。

それでも、私は亜季の友達という役を演じ続けなければならなかった。

このまま黙っていれば、亜季は傷つかない。誰も傷つくことはない。休み時間、昼休み、放課後・・・

亜季と一緒にいる時間、私の胸は人知れず痛み続けた。

そんな毎日を繰り返して、3月になった。

もうすぐ中1の日々も終わる。4月になったら、たくさんの新入生が入ってきて、私達も先輩になる。

部活で、特別しごかれた訳じゃないけど、やはり先輩になるのは待ち遠しい。

亜季と、そんな話を話していた。

もうその頃は、まだ多少罪の意識はあったものの、だいぶ楽に亜季と向き合えるようになっていた。

なにしろ3月。終わりの季節だ。

きっと、時間が解決してくれるんじゃないかと、私は思っていた。

3月の半ば、卒業式の予行練習が終わって、私は亜季いつものように部室へと向かった。

放課後の部活動もまた、私の罪を軽くしてくれていた。

詩を書くことで、先輩の雑談を聞くことで、私の傷口は少しずつ閉じようとしていた。

無論、亜季は私のそんな気持ちなんて知らないけど、このまま亜季と一緒にいれるだけで十分だと私は思った。

その日、亜季と喋りながら部室の前に来ると、いつもと違うふいんきが漂っていた。

いつも誰かが入るたびに開け閉めされる戸が、今日は開けっ放しになっている。そして、何やらザワザワと騒がしい。文芸部に関係のない者まで、数名紛れ込んでいるようだ。

「・・・どうしたんだろう？」

「さあ・・・」

何となく近寄りがたくて、私は亜季と2人でしばらく部室に入らずにその場で様子を見守って(?)いた。文芸部に入って1年、こんな事態は初めてだった。

部室の入り口辺りにいる生徒が、ふと後ろを振り返った。そうして、私達の姿に気がつくと、急に大声を張り上げた。

「みんな！来たよ！」

(え・・・?)

ザワザワが止まった。部室の中にいる人達が、一人残らず私達に注目している・・・何？

生徒達が端に寄って、ゲートを作るような形になった。入れ、ということだろうか。

亜季と顔を見合わせると、亜季も訳が分からないという表情だ。ますます困ってしまう。

とりあえず、中に入ることにした。一步ずつ、ゆっくりと歩く。亜季も、そんな私に合わせるように後ろから着いてきた。

部室の中に入ると、普段はあまり顔を出さない顧問の先生が真っ先に歩み出てきた。目が輝いて、頬は紅潮している。

先生は私達2人ではなく、亜季だけを見ていた。何？一体。

困惑した表情の亜季に、先生はゆっくりと近づいた。一度周りの生徒達を一望すると、それを代表するかのように彼女は言った。

「池田さん、あなたの作品が・・・コンクールで大賞をとったそうよ

!

10. 回想5（渦の正体）

ニュースは瞬く間に広がった。なにしろ全国規模のコンクールだ。凄さも半端じゃない。

翌日の卒業式も、亜季のニュースにかき消されるかのように目立たないものとなった。それでも、誰一人として亜季を憎む先輩はいなかった。物静かで、真面目な彼女はそれが好印象で、先輩達からも人気があったのだ。

亜季の受賞作は、本として出版されることになった。いわゆる作家デビューだ。

何もかもが、ものすごいスピードで決まっていって、それなのに私達はただそれにのまれるしかなかった。

私を、亜季を、とりまく世界が少しずつ変わろうとしていた。

「そのの、ジュース取って。」

「紙コップこれで足りる？」

「ちょっと、飾りつけ手伝ってよー。」

亜季の受賞が決まってから約1週間後。

文芸部の部室で、祝賀会が開かれていた。

まあ、祝賀会といっても、簡単なお菓子や飲み物が出たり、教室を折り紙で飾りつけしたりといった、かなり安っぽいものだ。

参加希望者が大勢いたけど、今回は文芸部員だけということでしょう承諾してもらった。

この1週間の間に、またいろいろあった。

新聞や雑誌の取材に始まり、編集部の担当さんとの顔合わせ、亜季自身からの全校集会での報告・・・

亜季は疲れていた。

紙コップにオレンジジュースを入れて、部室の中を歩き回る。今日の主役のはずの亜季は、隅の方で静かにたたずんでいた。

「亜季！」

「・・桃子」

「元氣ないじゃん、今日は亜季がメインなのに。ジュース、飲む？」
「ありがとう。」

壁にもたれて2人でジュースを飲んだ。多少周りに人はいるものの、久しぶりに2人になれた気がした。

「この後、また挨拶だっけ？」

「そう。なんか最近緊張することばかり。」

「慣れるよ、そのうち。」

「・・桃子、私どうしたらいい？」

「え？」

「・・桃子、私怖い。今まで自分の好きなように小説書いてきて、隣に桃子がいてくれて、それで十分だった。それなのに、急になんか大変なことになっちゃって・・これからどうなるかが怖い・・」
「思いもよらない亜季の告白だった。最後の方は涙声になっていた。」

亜季に目をやると、彼女は泣いていた。

ショックだった。亜季はこの1週間ずっと、1人で悩んでいたのだ。周りから見たら、すごい賞をとって、本も出せることになって、彼女は幸せの真っ只中にいるようにしか思えない。

それは悲しい誤解だったのだ。――親友なのに気付いてやれなかった。

しばらく私も亜季も黙っていた。亜季のすすり泣く声だけが聞こえる。しばらくたって、私は静かに言った。

「そのままで、いいよ。」

亜季が涙をためた目で、私を見る。

「そのままで、いい。・・もし、これから亜季の周りがどんな風に変わっていったとしても、亜季は変わらないよ。だって、亜季は亜季なんだから。」

「・・ホントにそれでいいの？」

「それでいい。大丈夫だよ。」

亜季は私の言葉を聞くと、ようやく涙をぬぐった。

「ありがとう。なんかスッキリした。」

「良かった。・あーもう、ひどい顔だよ。これからみんなの前に立つのに。ティッシュ持ってくるね。」

亜季が返事をしないうちに、私は歩き出した。返事なんかなくても、気持ちには十分に分かった。

ティッシュ・作業室のを使わせてもらうか。

部室を出て、すぐ隣にある作業室の小部屋へと向かった。ドアを開けようとして、私は一旦静止した。中から誰かの声が聞こえる。

「・・・でさー、池田さんの小説読んだんだけどー、やっぱ上手いよねー。レベルが違うっていうか。」

「だよー、ウチらとは別世界に住んでんだよきつと。」

いつも、一緒に行動することの多い、クラスの友達達の声だった。

なぜか、体が動かない。立ち聞きするような姿勢になってしまった。

「でもさー、なんで桃子なんかと仲いいんだろうね。ほら、あれじゃん？桃子って、池田さんの引き立て役っていうかさー。」

「そうそう、なんか前聞いたんだけどー、小学校の時に授業でほめられて文芸部入ろうと思ったらしいじゃん？自分で才能あるー？とか思ってたりにして。」

キャハハッと笑い声が起る。体が凍り付いた。

「顔も並以下だしさー、整形でもして出直してきたら？って感じ。」

「あ、それいいかも。実力じゃ無理だから、外見で勝負しまーすって感じ？」

もう聞いていられなかった。耳を塞いで、そこから逃げ出した。部屋には戻らなかった。ただ、走り続けた。

気がつくのと、屋上に来ていた。耳を塞いでいた手を、ゆっくりと下ろす。何も聞こえないのを確認して、ホッと息をついた。

もう、祝賀会の挨拶は始まっただろうか？一言だけでも、亜季に何

か言ってから来ればよかった。でも・・・もう亜季の顔を見たくない。友達達の声が、頭の中で鳴り響く。引き立て役、才能、整形・・・
「いやっ！」

思い切り頭を振って、言葉を散らそうとした。――友達じゃなかったの？そう思ってたのは私だけ・・・？

――もう、ダメだ。やっと気付いた。私は亜季に嫉妬している。

黒木君の気持ち、小説家の夢、生まれながらの美貌。亜季は私にな
いもの全部持つてる。

あの黒い渦の正体。今、やっと分かった・・・
その時だった。

突然、屋上の入り口が大きな音をたてて開いた。亜季が立っている。

「桃子、ここにいたんだ・・・ずっと探してたよ・・・」

亜季はマラソンでもしてきたかのように、肩で大きく息をしていた。
亜季が私の方に、歩み寄ろうとするのが目に入った瞬間、叫んでいた。
た。

「来ないで！」

自分でもびっくりするほどの大きな声だった。亜季は、足を一步踏
み出した姿勢のまま、固まっていた。

「桃子・・・？」

「どうして亜季っていつもそうなの？才能も何もかも持ってて、
なのにそれに気付かなくて・・・見てるだけで、イライラする！」

亜季は完全に言葉を失っていた。もう止まらない。私は狂ったよう
に叫び続けた。

「亜季だって、本当は私のことバカにしてるんでしょ！？顔も文才
も全部、自分より下なんだもんね！私と一緒にいれば、目立てるか
ら、だから一緒にいるんでしょ！？」

もちろん、そんな訳ないことは、私が一番良く知っている。だけど、
亜季のことが憎くて憎くてしょうがない。制御できない。

「亜季といると、私どんどん自分が惨めになる！！もう、引き立て
役はごめんだよ！！」

「もも・・・こ・・・」

「亜季なんか友達じゃない！！私の前から、消えてよ！！」
言った。

「も・・・こ・・・」

私は亜季を直視した。怖がらずに、見つめた。

「ご・・・めん・・・ね・・・」

亜季はかすれた声でそれだけ言うと、静かに屋上から出て行った。
本当に、静かだった。

ひとり残された私は、しばらくその場に立っていた。いつかのよう
に冷たい風が吹いていた。

11. 回想6（最後の記憶）

翌日から春休みなのはありがたかった。今は、1人になりたい。信じていた友達を失ってしまった。

毎日だらだらと過ごした。昼も夜も関係ない。食事やトイレとかの他は、ほとんどベッドで毛布に包まっていた。

横になりながら、机の上のフォトスタンドとカレンダーを見る。

フォトスタンドには、幸せそうな私と亜季の写真。カレンダーには、亜季のデビュー作の発売日の日に、印がつけられている。

亜季は、発売日に書店でサイン会をやることになっていた。

「私の前から、消えてよ！！」

あんな出来事があって、亜季は笑顔でサイン会をこなすことができるのだろうか。少し心配だ。

・心配ー？ いや、もう私は関係ない。もう亜季の友達じゃないんだから。

結局、サイン会には行かなかった。

そんな春休みが終わり、中学2年生。私と亜季は、別々のクラスになった。正直、ホッとした。

過去は捨てよう。新しいクラスで新しい友達を作って、過去は忘れるんだ。

私は必死で、女の子達のご機嫌取りに奮闘した。裏切られるのが一番怖かった。

努力のかいあって、何人かの友達ができた。しかし、それだっけいっ壊れてしまいか分からない。毎日笑顔を浮かべながら、私の心はきっと死んでいたと思う。

亜季の姿を見るのは、放課後の文芸部だけになった。すっかり有名になった彼女の周りには、いつも人だかりができていた。私はそれを遠くから見ることしかできなかった。

その唯一の接点だった文芸部にも、間もなく彼女は来なくなった。デビュー作が予想以上にヒットし、新しい作品の執筆に追われて、彼女は学校に来る時間さえなくなったのだ。

亜季のいない毎日。亜季と過ごしていた日々のことは、だんだんと記憶の隅に追いやられていった。

やがて時は流れ、高校受験も終わって卒業を間近に控えた頃、ふいに1日だけ亜季が学校に姿を見せた。

教室を貸しきって、「中学生作家・卒業の今」というコンセプトで、撮影を行う為だった。

その頃、彼女は名実共に売れっ子作家になっていた。撮影の行われた教室には、その様子を一目見ようと、当たり前のように多くの生徒が集まった。行きたくなかったのに、友達に引っ張られるようにして、私もなぜかその中にいた。

撮影は手短に終わった。終了と同時に、取り巻きがドツと押し寄せる。撮影のスタッフが、「どいてどいて！」と言いながら、人の波を散らす。

亜季は、スタッフに囲まれながら、守られるようにして、教室から出ていった。その時、本当にふいにその時だった。

人ごみの中で、偶然に、私と亜季の視線が合った。視線はすぐに絡み合い、亜季の顔にたちまち驚きの表情が浮かび上がった。私の表情は、かろうじて固まったままだった。

「桃子・・」亜季の口がそう動いた。恐怖に体中が包まれる。

気がつくのと、そこから駆け出していた。一緒にいた友達が何か呼び止めたけど、無視して走った。

教室から十分離れた安全エリアまで来て、ようやく私は足を止めた。――もう忘れかけていたのに。やっと忘れられそうだったのに。亜季と絶交した日の記憶が蘇る。頭を振って、消し去ろうとした。

私は、もう一度教室の方角を見てから、とぼとぼと歩いた。それ以来、亜季とは会っていない。

12. 逆訪問

そろそろとアルバムの表紙を閉じる。長い時間だった。

これらの事は、23になった今、ほとんど忘れていた記憶だった。もちろん、すぐに忘れられた訳じゃない。それこそ、時間が忘れさせてくれたのだ。

しかしそんな過去の光を閉ざした日々の中で、ふいに立ち寄った本屋などで、亜季の本を見かけることがある。彼女は今でも売れっ子で、名前を知らない人の方が少ないくらいだ。

私は私で出版社に就職しようと思ったのは、少しでも本や文字に関わっていたいからだ。それでもいざ就職が決まると、やらせられる仕事は、限りなくつまらない物だった。

売れっ子作家と平社員。月とスッポンもいいところだ。

しばらく床に座り込んだままボーッとしていたら、急に電話が鳴って我に返った。慌てて普通モードに切り替える。

電話のある場所から離れていたのも、10回目のコールでようやく受話器を取った。まだ大丈夫かな？

「はい、田島です。」

相手が出るまで少し空白があった。誰だ？

「もしもし。夢屋です。まだ、お帰りになってないかと思いましたよ。」

老人の声だった。なんでー・・・

「あの・・・よく家の番号分かりましたね。私、教えましたっけ？」

「ああ、番号表示されるようになってるんですよ。この前、うちにかけていただいた時のが履歴に残ってるんです。」

「あ、そうなんですか。」

なんとなくホッとした。夢屋のことだから、あなたのことは何でも分かるんですよ、とでも言われるのかと思った。

「それで今日、お電話をさしあげたのはですね、ひとつお願いがあ

るんです。」

「何ですか？」

「ええ、明日は・・・夢屋の方には出向かないでほしいんです。」

「え？」

「明日は、逆に私達があなたの家に伺わせていただきたいと思います。って
るんです。」

「・・・どういことですか？」

「それは、明日お話しします。今は、素直に聞いてください。」

老人が急に強気になって、私はそれ以上何も聞くことができなかった。まだ、疑問は残っていたけど。

私はそれから、家の住所や来てもらう時間帯なんかを老人と話し合った。打ち合わせはわりにスムーズに進んだ。

「では、夜分遅くにすみませんでした。明日、伺わせていただきます。
す。」

「いえ、こちらこそよろしくお願いします。」

「では、おやすみなさい。」

電話は切れた。おやすみなさい？時計を見ると――23時だった！
いつの間にこんな時間になってたんだろう。

まあとりあえず・・・

私は部屋をぐるっと見渡した。

「どこから片付けたらいいのか・・・」

片付けは長期戦に及んだ。

なにせこのアパートに住むようになってからは、部屋に人を招くという
ことがめったになくなっていったのだ。

夜中に始まった掃除は、東の空が明るくなり始めたころにやっと終
わった。体はくたくたになっていた。

急いで少し遅めの朝食をとって、急いで着替えた。昨日はスーツだ
ったけど、今日はそこまでかしまった服でなくてもいいだろう。
洋服ダンスを引っ掻き回してブルーのワンピースを選び、身を包ん

だ。

最後の身だしなみとしてブラシで髪をといていると、チャイムが鳴った。だいたい予定の時間通りだ。

ひとつ深呼吸してから、玄関へ行ってドアを開けた。老人は杖をついて立っていた。

「いらっしやいませ。一人で迷いませんでしたか？」

表情はしっかりしているものの、老人が今にも倒れそうな感じだったので、思わずそう言ってしまった。

「ああ、すぐに分かったよ。それに、一人じゃないからね。」
「え？」

老人が言うと、後ろから誰かが顔を覗かせた。

「小阪さん！」

「こんにちは、桃ちゃん。あ、おはようか。」

私が目を丸くしていると、老人が、

「君、昨日は彼女にいろいろと世話になったそうだね。今日もいてもらった方が、いろいろいいかと思ってね。」

「そういうこと。」

小阪さんが、おどけた表情で言う。昨日の笑顔と同じで、なんとなくホッとした。

「そうですか・・狭い部屋ですけど、ゆっくりしてってください。」
「

2人をリビングに座らせて、お茶を入れた。昨日とは全く逆の立場だ。人に招かれるのと同じくらい、人を招くのも緊張するものだ。お茶はいつも飲んでいるプーアル茶にした。これならたぶん、誰の口にも合うだろう。

「どうぞ。」

湯のみを2人の前に置いて、言った。2人とも静かに飲み始めた。なんだかドキドキする。

少しの沈黙の後、

「おいしい！」

「これは、いいお茶だね。」

社長と小阪さんの声が重なったので、私は笑ってしまった。

「あー、何よー桃ちゃん。笑うことないじゃない。」

そう言いながら、小阪さんも笑いそうだ。老人は、黙って微笑んでいた。

「万華鏡は見たかね？」

お茶が完売してから、ようやく本題に入った。

老人が言ったのが唐突だったので、返事をするまで少し間があった。

「昨日・・見ました。」

「じゃあ、分かっただろう。昨日、私が言ったことの意味が。」

「はい。・・夢が見えました。」

私が言うと、老人はひとつ頷いて、

「良かったらでいいんだが」

「・・はい？」

「どんな夢だったのか教えてくれんかね。」

私は少しまごついた。人に教えるほどたいした夢だろうか。

「私も聞きたいな、桃ちゃん。」

横から小阪さんが割って入る。なんとなく話さざるをえない状況になっってしまった。

まあ・・いいか・・

それじゃ、

「私・・小説家になりたかったんです。」

私はいろいろなことを話した。小学生の時の物語を作る授業のこと、中学に入って亜季と出会ったこと、ほろ苦い嫉妬の感情のこと、黒木君に嘘をついたこと、そして亜季と絶交したこと・・
とてつもなく長い話を、老人と小阪さんは黙ってじっくり聞いてくれた。考えてみたら、これらの体験を誰かに話すのは、初めてのこ

とだった。

最初は淡々と話していた私も、亜季との辛い過去の話までくると、こらえきれずに涙が溢れてきた。泣きながら、涙声で話を終えた。話が終わっても、しばらく誰も口を開かなかった。小阪さんが、黙ってハンカチを差し出した。私は静かに受け取って、顔に当てた。人前で泣くことなんて、めったにない。でも今、話すことで、溜まっていた思いが、一気に爆発した。止めることはできなかった。

「よく話してくれたね。」

老人が沈黙を破った。私はハンカチで顔を半分隠したまま、視線を上げた。

「辛かっただろう。よく一人で頑張ってきたね。」

老人の言葉が優し過ぎて、胸にしみて、更に涙が出てくる。言いたいことはあるのに、言葉にならないのがもどかしかった。ただ、涙が止まらなかった。

どれくらいの時間が経っただろうか？

ずっと泣き続けていた私も、ようやく気持ちが落ち着いてきた。ハンカチは涙でぐっしりになっていて、私の思いの爆発を表していた。

2、3度鼻をすすってから、しっかり老人と小阪さんに向き合って

1・・・小阪さんがいない？

私の困惑した表情に気づいたのか、老人が、

「ああ、小阪君なら今キッチンだ。」

と言った。なんでそんなところに？

「今ね、この家の「気」を調べてもらっているんだ。」

「「気」？」

「そうだ、家というのはね、そこに住んでいる人の気持ちや精神状態やらが自然と現れるものなんだよ。せっかく忘れていた夢を見つけることができて、悪い「気」が漂っていたら、状況は悪くなる一方だろう？」

「じゃ、今日わざわざ家に来たのはー・・・」

「ああ、そのためだ。」

そこまで話したとき、小阪さんがキッチンから出てきた。右手に虫眼鏡のようなものを持っている。

「思ったとおり。」

小阪さんが肩をすくめて言った。

「家中、邪気が漂ってる。かなり重症な方だわ。」

家中ー・・・もう全部調べたのか。片付けておいてよかった。いや、そんなことより、

「あの・・・その「邪気」をなくすことはできるんですか？」

すぎるような思いで言った。私としても、そんなところで暮らしていくなんてごめんだ。

「そうね、完全に消すのは無理だけど、程度を軽くするのなら簡単よ。」

「・・・どうするんですか？」

「これで、ね。」

小阪さんはそう言って、左手をあげた。手に握られているのは、スプレーだ。

「・・・そのスプレーで？」

「そう、見た目は普通だけどね、消臭や防虫用じゃないのよ。」

試してみる？と小阪さんが私にスプレーを手渡した。・・・本当にこれで？

半信半疑なまま、キッチンの中でシュッと一吹きしてみた。爽やかな森の香りが広がる。

「良くできてるでしょ？」

小阪さんが満足そうな表情で頷く。もしかしてー・・・

「これも、夢グッズ製作部で作られたんですね？」

「ご名答。」

やっぱり、ね。

私はそれから家中全ての部屋を回ってスプレーした。森の香りが家

の中のどこまでも広がり、本当に森の中に迷い込んだかのような錯覚に陥った。

しかし居心地は悪くなかった。むしろ何か目が覚めたようなすっきりとした気分だ。

「匂いはそのうち取れるから。」

小阪さんが私の使い終わったスプレーをカバンにしまいながら言った。

「でも、だいぶ邪気も取れてる。もちろん、桃ちゃんの心がけが大事だけど、ね。」

「・・・はい。ありがとうございます。」

邪気を取る作業(?)を終えて、私たちは再びリビングのテーブルを囲んだ。きゅうすに入ったプーアル茶は、もうすっかり冷たくなっていた。

しばらく誰も話そうとしなかった。それぞれがそれぞれに何かを考えて、だけどそれを言葉にすることがしばらくできなかった。

やがて一番考え込んでいた老人が、私の方を向いて、重々しく口を開いた。

「小説家になりたい、と言ったね。」

「はい。」

「その・・・友達のこともあるだろうが、なんで諦めてしまったのかね?」

「・・・そんなの・・・無理に決まっています。私には文才もないし、世の中には小説家志望の人がいっぱいいるでしょう。現実くらいちゃんと分かってます。」

老人はひとつ息をついた。

「現実・・・もちろん現実も大事だ。君の言っていることは間違っていない。でも、だからこそ聞かなくて、それでは君はその夢に向かって何か一つでも努力したかね?」

「・・・・・・・・」

「無理だと君は言うがね、私には分かるよ。君はまだ夢を諦めてい

ない。いや、諦めきれていない。――分かるよ。」

「・・・・・・・・」

「だからこそ、君には何もしないうちから逃げないでほしい。自分なりに努力して挑戦して――」

老人はゆっくりと微笑を浮かべた。

「諦めるのはそれからでも遅くはないんじゃないかね？」

13. 新しい夢

『季節が初夏を間近に控えたある日、私は会社をクビになってしまった。』

理由は、いわゆる経費削減のためのリストラで、私もその枠の中にしっかり入っていただけの話だ。・・・』

夢屋2階の会議室。

私はひとり、コツコツと原稿用紙を埋めていた。事實は小説より奇なり、と言うけれど、私は自分の体験を小説にすることにした。老人に言われたとおり、私は夢から逃げていたのかもしれない。だから、少し遅いかもしれないけど、これは私なりの努力なのだ。原稿のマス目がひとつひとつ埋まっていくたびに、ひとつひとつ夢に近づいていくような気持ちになった。

この小説を書き始めて、すでに一週間が経過していた。

「お、やってるね。」

会議室の扉が開いて、小阪さんが顔を出した。毎日、仕事の合間をぬって、こうして私の様子を見に来るのだ。もう、すっかり私の本当の先輩のようになっていた。

「もう少しで完成します。」

私はペンを原稿の上に転がして言った。一日中手を動かしていたので、さすがに疲れてきた。

「ホント？出来たらさ、絶対すぐ私にも見せてよね。」

小阪さんは目を輝かせて言った。

「いいですよ。あ、でも・・最初に見せないといけない人がいるんです。」

私がそう言っただけで、小阪さんは誰のことか分かったようだった。

「あ・・そうか。じゃ、2番目に見せてよ！約束ね？」

小阪さんがゆびきりげんまんの形にした手を差し出した。私は笑って、指を絡ませた。

外が暗くなったところ、ようやく小説は完成した。かなりの長編になり、またかなりの達成感を感じていた。

私は原稿の束を整えると、エレベーターで1階へと向かった。まだいるだろうか？

目的地は社長の部屋ひとつのみ。私は扉の前に立つと、ゆっくりとノックした。

「どうぞ。」

扉が開き、大きな椅子に座って、書類をチェックしている老人の姿が現れた。

老人は入ってきたのが私だと気づくと、書類をめくる手をピタリと止めた。

「出来たんだね。」

「・・・はい。」

老人の視線が私の手に持っている原稿に注がれた。

老人は、椅子から立ち上がると来客用の方のソファに座りなおした。

「それじゃ、見せてもらおうかね。」

私は静かに原稿を渡した。

それからどの位たったのだろうか？30分かもしれないし1時間かもしれない。時間の経過が分からなくなるほど、私は現実の世界から遠く離れたところにいた。

それは緊張や不安ともちよつと違う、今までにない感覚だった。

「・・・ありがとう。」

私を現実に戻したのは、老人のその声だった。その声で、私は社長室にいることも、小説を読んでもらったことも思い出した。

「とても、良かったよ。」

老人が私の目をしっかり見つめながら言った。お世辞や無理に言った言葉でないことは、表情に表れていた。

「しかし、何より良かったのはね。」

老人がひざの上で手を組みなおして言った。

「君がひとつの作品を書き上げたという、このことだよ。それを忘れないでほしい。」

「・・・はい。」

「それにね、たとえ夢が叶わなかったとしても、君がやってきた努力に何一つ無駄なものはないんだよ。それも忘れないでほしい。」

「はい。」

私は老人の言葉を聞きながら、小阪さんの話を思い出していた。足の靱帯を切って、夢に見放されてしまった老人。もしかしたらこの言葉は、自分自身に聞かせてもいるのではないかと思った。

「今の君はとてもいい表情をしているよ。・・・もう大丈夫だね。」
老人はそう言って、優しく微笑んだ。

それが私が最後に見た老人の笑顔だった。

次の日、私は少し早めに家を出た。

正式に、夢屋で働かせてください、とお願いしようと思っていたのだ。もちろん、小説家の夢も忘れてはいないけど、夢屋と離れたくなかったのだ。老人に小阪さん。どんな顔をするかな。

昨日までと同じように、同じ道を歩いた。信号機に、銀行に、パン屋さん。目印をたどって・・・

（・・・え・・・？）

夢屋の前、いや、夢屋だったところの前まで来て、私の体が凍りついた。昨日まで夢屋があった場所には・・・別の会社が建っていた。何かに追われるかのように、私はその建物の中に駆け込んだ。中も全く別の会社だった。フロントの受付嬢に、質問を浴びせかけた。

「あー！ここに、夢屋って会社があるはずなんですけど！なんで、違う会社になってるんですか！？」

「夢屋・・・？」

受付嬢は隣の同僚と顔を見合わせて、

「さあ、そんな会社は知りませんが・・・ここは前からうちの会社ですよ？」

「嘘・・・」

体の力が抜けた。そんなことって、あるのだろうか。

フラフラになりながら、外に出て、ゾンビのように道を歩いた。道行く人達の視線を感じたけど、そんなのどうだっていい。

老人、小阪さん。もう2度と会えないのかと思うと、たまらなくて涙が出てきた。昨日のあれっきりで最後なんて、ひどすぎる。

行くあてもなく、川原にやってきた。座り込んで、考える。

全部、夢だったんだろうか。――そんなはずはない。カバンには今でも万華鏡が入っているし、何よりこんなにはっきり覚えている。

（もう大丈夫だね。）

あれは、別れの挨拶だったのだろうか。だから消えちゃったの？

私はそのまま静かに涙を流して、静かに泣き続けた。――永遠に思えるくらい、長く。

エピローグ

ずっと呼び続けていたタクシーは、6台目でようやく止まってくれた。

「3丁目のFビルまで。」

車が動き出すと、ようやく気持ちが落ち着いてきた。それでもまだ少しドキドキしている。

運転手のおじさんが、私の手に抱えられている花束に気付いて、言った。

「おお、すごい花束だねえ。彼氏にでもあげるのかい？」

「・・・ちよつと違いますね。」

「おお、そりゃあ意味深だねえ。」

夢屋が消えてからもう1ヶ月になる。

私なりにいろいろと考えた。どうして夢屋は私を引き合わせたのか。そしてどうして消えたのか。

どんな出来事にも、何かしらの意味があるはずだ。間違いなく夢屋は私を救ってくれた。自分の夢も、過去も。全部リセットしてやり直すことができるかと教えてくれた。

あれから、私は一つずつの事を大事にこなしていった。出版社をクビになったことも、正直に両親に話した。やはり、最初は驚いていたけど、ちゃんと別の仕事を探すと言うと、それ以上は問い詰められなかった。

小説はこれからも書き続けるつもりだ。プロにはなれなかったとしても、自分が好きなことならそれでいい。これも、夢屋が教えてくれた。

そして一番辛かったけど、亜季ともちゃんと向き合おうと思った。亜季の本を買い込んで、じっくり読んだ。どの作品も、亜季らしさが表れていて、少し胸が切なくなった。

最新刊のあとがきで、今日Fビルでサイン会が行われると告知され

ていた。

正直、怖かった。今、亜季と顔を合わせて、私は自分を保てるだろうか。でも、これを逃したら、もうチャンスはないとも思ったのだ。そうして、今、私はこのタクシーに乗っている。

「もう少しで着きますよ。」

おじさんがバックミラーを見て、言った。

花束を握りなおす。

サイン会で亜季に会ったら。今までのことを謝ろう。全部やり直そう。

そうしてもしも亜季が許してくれたら。私はこう言うんだ。

「友達に、なろうよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3421c/>

夢屋

2010年10月11日13時01分発行